

近世日本における行列

久住 祐一郎

はじめに

そもそも行列とは何か、ということですが、複数の人や乗り物などが列を成して進むこと。言い換えればパレードです。行列はいろんな場面でおこなわれています。例えば軍事的な行事、祝賀行事、それから宗教的な祭礼などです。なぜ行列＝パレードをするのかというと、見物人に見せるために、隊列を組んで行進をしています。一方で、行列の構成員にとっても、彼らの士気を高め、集団感情を高揚させるといった効果も期待されます。

歴史的に見れば、古くは古代ローマの凱旋式があります。これは軍事的な行事ですが、それ以降、洋の東西を問わずさまざまな形式で行列がおこなわれています。もちろん、現在でもあちらこちらでパレードがおこなわれています。例えば、最近ありました皇室の祝賀御列の儀や自衛隊の観閲式。あるいは、プロ野球で優勝した球団や金メダルをとったオリンピック選手などのパレード、あるいはテーマパークにおける楽しいショーパレード。こういったものが現在でもおこなわれています。

1. 行列の時代

今回は近世日本、つまり江戸時代の話をいたします。

日本の近世というのは、実は「行列の時代」であるということが言えます。

例えば大名行列。これは江戸時代の行列で一番に思い浮かぶ有名な行列です。

【図1】は東海道を通る大名行列です。だいぶ省略されたもので、もちろん実際の風景を描いたものではありませんが、城下町や宿場町がある東海道を大名行列が行き交うという風景は、江戸時代にはよく見られました。大名行列といえ、こうして主要な街道を通る参勤交代の行列をイメージする方が多いでしょうが、大名屋敷が建ち並んでいた江戸では、江戸城へ登城する大名行列が日常的に行き交っていました。

幕府の将軍がおこなう行列もあります。将軍の上洛行列や日光への社参行列といったものです。諸大名も動員され、供連れの人数や荷物の量は、一般の大名行列とは比べ物にならない規模でした。

武士の行列では、ある武士がその集団内でどのぐらいの位置にいるのか、例えば大将なのか、足軽隊長なのか、一兵卒なのかといったものがそのまま行列に反映されます。武士のヒエラルキーが視覚的にあらわれているというのが特徴です。

次に朝鮮通信使、琉球使節、オランダ商館長。こういった外国からの来朝使節



【図1】東海道図屏風（部分、豊橋市美術博物館蔵）



【図2】日本年歴一覽（豊橋市二川宿本陣資料館蔵）

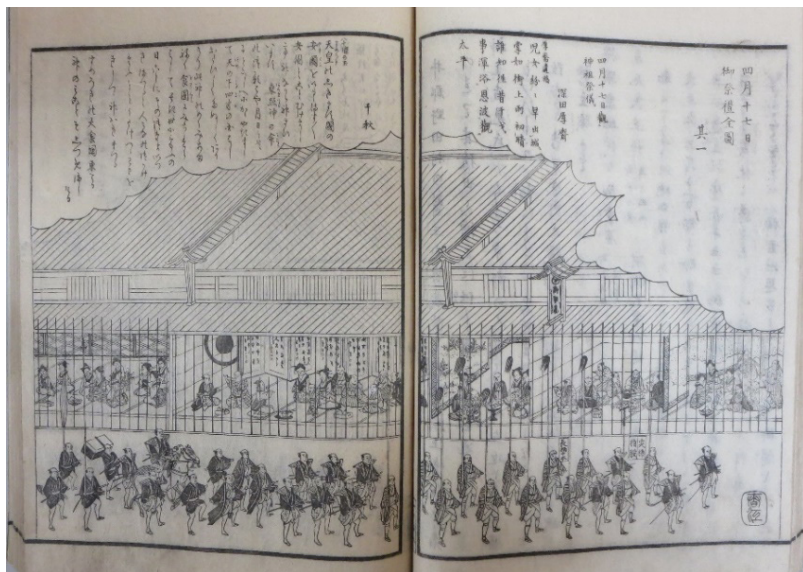
も行列を組んで行き来していました。それ以外に珍しいところでは、象やラクダなどの珍獣の行列もありました。来朝使節や珍獣の行列は、庶民にとっては娯楽という側面もあります。つまりは見せ物になるのですが、主要な街道を通るため、沿道に集まった庶民が珍しいものを見るといふイベントでもありました。【図2】は享保十四年（一七二九）

に八代將軍吉宗が呼び寄せた象が、長崎から江戸まで旅をした時の行列です。この図では、後方の木の陰に子どもを背負った女性などの見物人が描かれています。大変珍しい、誰も見たことのない生き物が来るといふことで、沿道にたくさん見物人が集まってきたことがわかります。

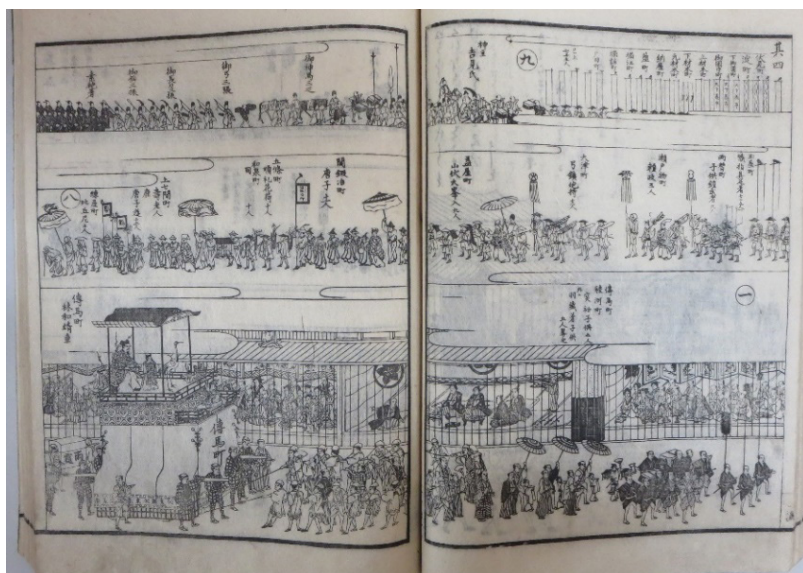
それから都市の祭礼です。これは庶民も行列に参加することができました。江戸時代におこなわれていた祭礼というと、京都の祇園祭や江戸の神田祭などが有名ですが、それ以外にも全国各地の城下町で都市型の祭礼がおこなわれており、そこでも行列を組んでいました。庶民であっても武士や外国人などの仮装をして行列をすることもありました。

【図3】は名古屋城下の東照宮祭礼行列の様子です。東照宮は徳川家康を祀った神社で、日光や久能山が有名ですが、諸大名がこぞって東照宮を造営したため、全国に約五百五十社もあったといわれています。東照宮祭礼は極めて政治色の強い藩

主導型の祭礼であり、武士と町人と同じ祭礼に参加していました。この図でも、尾張藩の武士の行列と、各町の町人が出す山車が名古屋城下を進む様子が描かれています。



【図3-1】尾張名所図会（豊橋市二川宿本陣資料館蔵）



【図3-2】尾張名所図会（豊橋市二川宿本陣資料館蔵）



【図4】三河国吉田名蹤綜録（個人蔵）

【図4】は吉田城下の白山社祭礼行列です。名古屋の祭礼と比べるとかなり規模が小さくなりますが、お神輿を中心とした行列が描かれています。大きな社寺だけでなく、各町や村の祭礼でもこうした行列がおこなわれていました。

このように、全国各地で大小さまざまな行列が行き交っていたのが、江戸時代の特徴であると言えます。

ここまでいろいろな行列を見てきましたが、ロナルド・トビさんは、行列には「見ル・見セル・見ラレル・見セラレル」という「四見の原理」があると言われています。

朝鮮通信使を例に見てみましょう。ここにはさまざまな立場の人が関わってきます。幕府にとって、通信使の行列は、国内に対して公儀としての威光を「見セル」ための手段でした。朝鮮という異国が、幕府の威光にひれ伏して朝貢してきたというように見せて、国内の人々に幕府の威光を見せ付けたのです。

一方で、使節を派遣する朝鮮国にとっても、小さな島国である日本に自国の威光を「見セル」ための手段でもありました。

そして、日本と朝鮮の仲介者である対馬藩にとっても、両国の間を取り結ぶ役割を果たしているという重要な立場にいる対馬藩の存在感を「見セル」ための手段でもあります。

ほかにもさまざまな「四見の原理」がはたらかみます。例えば、沿道の見物人が朝鮮通信使を「見ル」という見せ物的な見方。逆に朝鮮通信使の側が沿道の見物人や日本の各地の街並みを「見ル」という側面もあります。

それから、幕府が沿道の見物人に朝鮮通信使を「見セル」。これは朝鮮通信使が幕府の威光になびいてわざわざ海を越えてやってきたんだということを見せている。幕府が沿道に見物人を集めることで、自分が支配している日本という国の賑わいや繁栄ぶりを朝鮮通信使に「見セル」。一方で、朝鮮通信使が幕府や沿道の見物人に、自分たちの朝鮮国はこんなに素晴らしい国なんだということ「見セル」。

朝鮮通信使は沿道の見物人から「見ラレル」存在であり、沿道の見物人も朝鮮通信使から「見ラレル」存在である。相互に見たり、見られたりという関係です。

また、朝鮮通信使が幕府から日本の文化や風俗を「見セラレル」。これは対外的にきれいに取り繕ったものも含まれます。そして、沿道の見物人が幕府の威光を「見セラレル」。

このように、一つの行列を取ってみてもいろいろな「四見の原理」がはたらかき、それぞれの立場における多様な思惑が複雑に交錯していました。

朝鮮通信使が通行する際には、いろいろな町触れが出されました。見物人の見苦しいしぐさを見られたり、不潔な町の様子を見られたりすると、朝鮮国に侮られてしまい、幕府の威光が台無しになってしまうため、そういったことがないようにということでした。

明暦元年（一六五五）に出された町触れ（「通航一覽卷之四十六」所収）を見ていくと、表通りに面した長屋の壁を塗り直し、屋根で破損しているところがあれば早々に修理しなさいということ。それから長屋の庇の上や二階の出格子、格子窓に見苦しい物を置いてはいけないということ命じています。

また、「道悪しき所は砂を置き申すべく候」、あるいは「はきだめ汚泥などにて築き申すまじく候」ということで、通りをきれいにしておきなさいと言っています。それから「物干し取らせ申すべき事」などとして、見苦しいものは人目に付かないようにすることを命じています。腰板が破れた所は修繕をして、同じ色に塗りなさいとも言っています。

朝鮮人が通行する際に二階で見物してはいけないというお触れも出ていますが、これは上から見下ろしてはいけないということ。ほかに、朝鮮人が通る際に指差しをして笑ってはいけない、橋の上で見物してはいけない、行儀よく無作法なことがないようにということで、こういった見物人の作法に関するお触れを出しています。当時の朝鮮通信使の通行を描いた屏風には、行儀良くしている人ももちろん描かれていますが、中には指を指して笑っている人や橋の上から見ている人といった、行儀が悪い、無礼で無作法な描き方をされている人も描かれていますので、こうしたお触れが出されたということは、実際にこういうことがあったということの裏返しでもあります。

こうした通行人に対する規制というのは、見物人が異国の使節から「見ラレル」存在であるということと幕府が強く意識しているということ。つまりは幕府の面子に関わる問題であったということです。

行列というのは、行列主体の権威や存在を誇示するために演出されたものです。それは行列の構成員に限らず、見物人もその行列を取り巻く空間の一部となり、目的をもって演出されたものになります。一方で、知らず知らずのうちに演出の一部となった行列を「見ル」「見セラレル」見物人にとって、行列の見物は非日常の娯楽でもありました。

2. 大名行列を「見セル」

次に具体的な事例を紹介したいと思います。まずは大名行列です。一番有名な大名行列は参勤交代です。参勤交代というのは、幕府が諸大名に課した服属儀礼です。各大名も多く供連れや華やかな道具で飾った行列を立てることで、



【図5】安政武鑑（部分、国立国会図書館デジタルアーカイブ）

自らの武威を誇示する場でもありました。

参勤交代で大名が一年おきに国元と江戸を行ったり来たりしますが、全国で約二百の藩の大名行列が通行したことで、各地の街道や宿場町が整備され、その結果、庶民にとっても旅がしやすい時代になっていきました。

大名行列のシンボルは何かといえますと、鎗です。しかも立てた鎗です。寝かせているのではなく、立てた鎗というのが、武士の行列、大名行列のシンボルでした。これは遠くからでも良く目立つたことです。絵画表現でも、立てた鎗を描くことで、そこに武士の行列がいるという

ことを示していることがあります。武士の行列で単に「道具」といえば、これは鎧を指します。行列の主人によって、この鎧の装飾や本数、立てる位置は駕籠の前なのか後ろなのかといったことが異なっています。鎧を見ることで、この行列の主人はどういう身分であるかというのが一目でわかります。鎧持ちを従えるということは、一人前の武士の証でもあります。

【図5】は幕臣や大名に関する情報をまとめた武鑑のうち、三河吉田藩主松平伊豆守の箇所ですが、行列の際に立てる鎧が図入りで紹介されています。この鎧が見えたら、この行列は松平伊豆守の行列であるということが一目でわかるようになっていきます。

次に道中法度を紹介します。これは、大名行列のお供をする人たちに対して出された触書です。次の史料は、松平伊豆守家の四代当主松平信祝のぶとむが、享保十四年に大坂城代として大坂に着任する際に出された十五か条の道中法度です。

- 一 (一)、道中此度御役義に付別て相慎、無礼之体無之、がさつ成義毛頭不仕様に可相嗜事
- 一 (二)、喧嘩・口論可相慎事

附、大酒すべからざる事

- 一 (三)、行列無混乱、肩替等も一同可心得、馬之沓打候時は片脇へ寄、早速打替、元之行列へ可乗入、歩行供之者は用事相達候儀も可為同前事

一 (四)、荷印、乗かけに懸候袋、其外験之儀闕べからざる事

一 (五)、舟渡・歩行渡、行列之ごとく順々先より跡迄不可混乱事

一 (六)、行を二行にして往時船渡・歩行渡・橋等は右より先へ、左は跡に渡るべし、若一同に渡時は順々、跡ほど

川下を渡るべし、惣て渡場之前後さはがしからざる様に可心得事

- 一(七)、旅宿火之元入念、鉄炮之もの筒薬等に心附候様申付べし、若出火有之時のために、武具等退所能々可見置事

附、出火有之時は、近習向駕籠廻り之者は格別、其外は役人指図なくして蒐集るべからず、尤火事場へも可為同前事

- 一(八)、川留等有之及逗留時、猥徘徊すべからざる事

- 一(九)、宿割之指図守之、宿々善悪批判すべからず、渡場にしては川割之指引不可相背事

- 一(十)、押買・狼藉禁止也、少々之賃錢料物たりとも廉直に可払之事

附、旅籠馬錢其外品によりて証文可取之事

- 一(十一)、武具用來候かな物之金銀は格別、用意之武具等に金銀は勿論、はく之類にても一切不可用之、武具・馬具其外不依何用立候義無用、都て花美不可仕事

- 一(十二)、騎馬之者、馬を勞り可乗事

- 一(十三)、歩行にて供仕候近習・中小姓之類、平生之通黒羽織紋附たるべき事

- 一(十四)、道中音物不可受納候、由緒有之は可為格別事

- 一(十五)、不依何事、役人之指図不可違背事

右之条々堅相守、下々又もの迄も急度可申付候、已上

第一条は、今回は大坂城代という特別な役職に就いたので、これまで以上に慎ましく、無礼なことがないように、

がさつな振る舞いは決してしてはいけないということを言っています。

第二条は、喧嘩や口論をしてはならないということと、大酒をしてはならないということ。道中でもお酒は飲みますが、飲み過ぎてはいけないということです。

第三条は、行列の隊列を乱さないようにということです。肩替と言って、途中で荷物持ちが交代する場合も、きちんと元の場所に並ぶようにします。さらに、馬の杓を打ち替える際は、脇へ寄って素早く替えて元の場所に戻ります。歩いて供をする人も、何か用があつて行列を抜ける際も、同じ場所に戻ってきなさいということです。

第五条は、橋が架かっている川を船や徒歩で渡る際は、順番に渡って、列を乱してはいけないということです。

第九条は、宿場町で泊まるときは、旅籠屋の割り当てをおこなう宿割という藩士の指示に従い、宿場の良し悪しを批判してはいけないということです。

このように、道中法度では行列の構成員が無礼でがさつな振る舞いをするのを禁止し、行列の隊列が乱れないようにということに注意を払っています。これは、そうしたことが人目に付くと、主人である松平信祝の面子に関わってくるためです。街道で「見ラレル」ことを意識しているわけです。ちなみに、行列の構成員の七割から八割は正規の藩士ではない派遣労働者でした。人数を多く「見セル」効果も期待されましたが、一方でがさつな振る舞いをする者もいたため、こうして道中法度を教えこむ必要がありました。

続いて、三河吉田藩の参勤交代の具体的な事例を紹介します。吉田藩の場合、江戸と吉田の間約二百八十九キロを通常六泊七日で旅しました。道中では、毎日九時（午前零時頃）に準備をきなさいという合図で拍子木がカンカンと鳴らされ、起こされます。これを支度触といいます。八時（午前一時四十分頃）になると御供触といって、また拍子木が鳴らされて、出発の準備をきなさい、行列に並びなさいという指示が出ます。それから七時（午前三時二十分頃）

に御発駕ということで、殿様の駕籠が発発します。

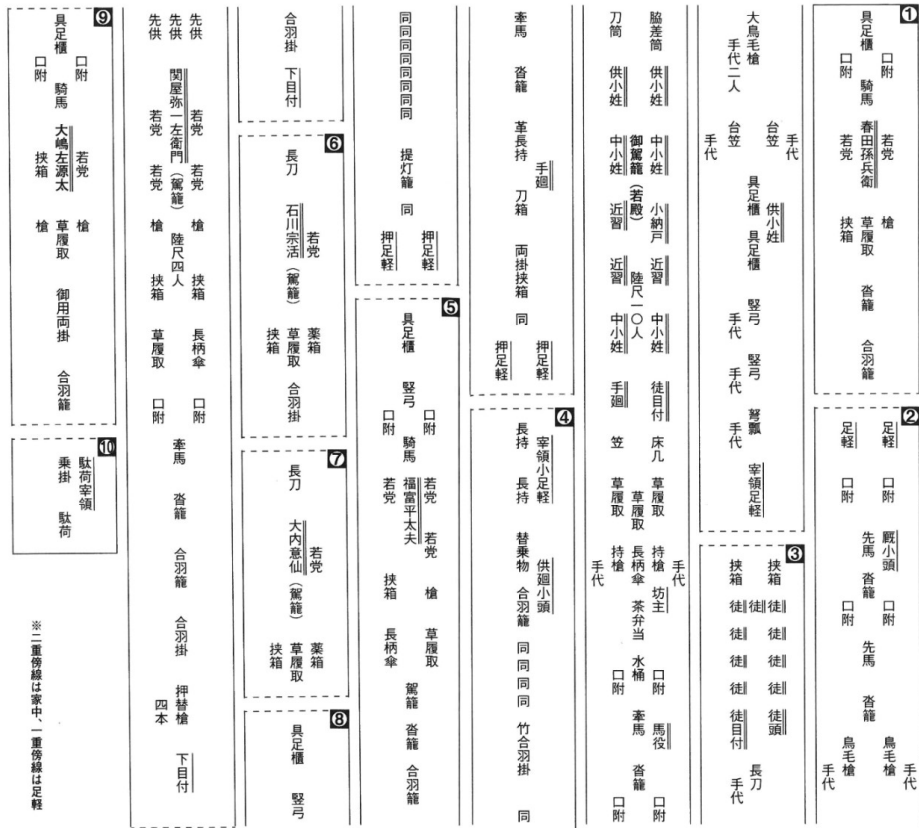
出発後は宿場や立場茶屋などで小休・昼休という休憩を入れながら、一日十里前後、約四十キロを歩き、日没前に宿泊地である宿場町の本陣に到着します。こういったサイクルを繰り返して旅をしました。

大名行列の構成ですが、長い行列を揶揄して「大名行列」と言うように、大名行列というのは長いものです。確かに長いのですが、よくよく見てみると小さな行列の集合体になっています。

【図6】は、吉田藩の若殿松平信宝のぶとみが初めて吉田へお国入りした際の行列の、惣行列という一番大人数の構成です。この惣行列は、十個の行列の集合体ということがわかります。この中で、最も長い三番目の行列が若殿本隊の行列です。「御駕籠」の中に若殿が乗り込み、その周囲を小姓・近習といった若殿の身の回りの世話をする正規の藩士たちが取り囲んでいます。

松平信宝のお国入り行列のお供の構成は、正規の藩士が五十四人、足軽身分が三十二人で、中間と呼ばれる派遣労働者が二百五十九人で、合わせて三百四十五人でした。この三百四十五人全員が一度に行列を構成したわけではありません。【図6】の行列の人数を数えると約二百十人になります。残りは宿場町の本陣へ先回りして本隊を迎える準備をする担当や、行列の後からついてきて宿場町の支払いをする担当のような別働隊でした。

吉田藩の大名行列は三種類あり、それぞれ場所によって使い分けをしています。先ほど見た惣行列は、人目が多く目立つところである城下町、宿場町で昼休みを取るとき、関所の前、それから川を渡る前です。これらの場所では、一番豪華な行列を立てました。次に本隊の行列を少し減らした本行列があり、宿場町を通行するときにはこの行列を建てます。それから、野間と呼ばれる宿場と宿場の間の何もないうようなところ、人目につかないようなところは、本行列からさらに人数を減らした引行列という、最も簡略化した行列でスピードを上げて進み、時間と費用の節約を図



【図6】松平信宝のお国入り行列（惣行列）

りました。

松平家の大名行列を絵画的に表現した図もあります。これは参勤交代の行列ではなく、大坂城代に着任した藩主が大坂城へ入城する際の行列だと思われませんが、藩主の駕籠があり、その周りを側近の藩士が取り囲んでいる様子が描かれています。そして、駕籠の前には鎗が二本立っています。これが松平伊豆守の行列であるという目印、シンボルです。奥側の鎗は、柄の部分が全て螺鈿細工で覆われており、日光が当たれば全体がキラキラと光って、大変目立つただろうと思われれます。

吉田藩の参勤交代のルートですが、天保年間後期以降の吉田藩上屋敷は呉服橋門内、現在の東京駅の北端にありました。屋敷を出た後は鍛冶橋門を通過し、門の外で本行列を組んで五郎兵衛町・豊町を抜け、京橋

の手前で東海道に合流します。新橋から先は引行列で進み、品川宿の手前で本行列に戻して宿場内を通りました。品川宿で見送りの者たちに別れを告げ、目的地である吉田を目指して東海道を進みました。

このように、大名行列は「見セル」ポイントを押えつつ、人目がないところでは隊列を崩して先を進むという方法をとりました。次に紹介する来朝使節の行列の場合も、基本的には大名行列と同じような方法で街道を進みました。

3. 来朝使節を迎える

次は外国からの来朝使節を迎えるときの様子を紹介します。

いわゆる「鎖国」体制下にあった江戸時代の人たちにとって、外国人を見る機会は朝鮮通信使や琉球使節といった来朝使節の通行時に限られていました。来朝使節の通行は、幕府にとっては重要なプロパガンダでした。使節の通行時には諸大名を動員して接待させることにより、幕府と大名の主従関係を再確認させました。また、沿道や宿泊施設を整備し、きれいな状態で外国の使節を迎えることで、日本の素晴らしさを演出しました。見物人の作法に関する触書もその一環と言えます。

一方で、見物人である庶民にとっては非日常の娯楽でした。朝鮮や琉球から使節が来るとなると、行列が来る前に様々な出版物が刊行されました。前回の来朝時の情報をもとに行列の様子を描いた図、それぞれの国の歴史や文化に関する書物といったものが刊行され、一種の朝鮮ブーム、琉球ブームのようなものが、行列そのものがやってくる前に起こりました。

もちろん行列が通行する当日も大変賑わいますが、行列が過ぎ去った後にもその影響が残ります。例えば唐子踊り、

あるいは祭礼の出し物として朝鮮人や琉球人のような格好に扮するといったことが見られます。

具体的に現在の愛知県事例をもとに、琉球使節が通ったときの様子を詳しく見ていきます。

まずは、天保三年（一八三二）の琉球使節（謝恩使）が名古屋を通行した際の様子を詳しく描写した『琉球画誌』（公益財団法人東洋文庫所蔵、画像データベースURL：http://124.33.215.236/gazou/2010/gazo2010_read.php?TGName=3H-a10-29）という書籍を紹介します。尾張藩士で画家の小田切春江が書いたものです。

琉球使節が通行する前の様子として、「琉球人來朝の評判日々に高ければ、このごろ町々を唐人の出で立ちにて、一人は長刀を持ち、今一人は金だらいをたたきて琉球人の真似をなし歩く」という記述があります。この二人組は大道芸人です。流行に乗って、こうして琉球人の格好をしてパフォーマンスをしてお金を稼ぐわけです。絵草紙などの琉球使節に関する出版物が売り出されている様子も描いています。使節の通行前から、こうした琉球ブームが醸成されていたことがわかります。

琉球使節が通る予定の道路も整備されました。「本町京町通りは勿論、全て琉球人の通行する道筋は一統に地行直り（中略）あるひは屋根をふき替え」ということで、道路を均して、屋根のふき替えをしています。屋根瓦も磨かれたため、どの家も大変きれいになり、「誠に見まごうごとくなれり」と書かれています。さらに、メイン通り以外の道筋でも様々な場所が修理されていたため、「御城下の町々常に倍して結構になりたり」と記述されており、普段よりも倍ぐらいきれいに見えるという効果がありました。

行列本体が通行する前には、たくさんの荷物が通過しました。琉球人に先行して長持が本町通りを通行するということで、薩摩藩の役人が宰領、つまり世話役として、前後に付いています。これは小田切春江が直接見たわけではありませんが、見物した人の話を聞いて、こういう感じだったということに絵を描いています。ずらりと並んだ多くの

長持があるので、当時の人たちは、中には何が入ってるんだろうと気になって、いろいろ噂をしていて、食べ物が入っているのではないか、幕府への献上品が入っているのではないかなどと話し合っていたそうです。春江個人としては、聞いた話によると琉球の人たちの食べ物はい々と大して変わらないということなので、長持の中身は食べ物ではなく、幕府に対する献上品がたくさん入っているのだろうという推測をしています。

いよいよ琉球人の行列が通行することになりますが、春江は名古屋の広小路における見物人の様子を描いています。説明文には、丸太を柵にして見物席をつくっており、一人前の料金が三十二文くらいであるというようなことを書いています。三十二文というと、現在の感覚で言えば五百円以上、千円まではいかないという感じですが、この当時の江戸両国の芝居見物や床屋の料金が三十二文くらいですので、そういったものと同じくらいの値段でこの見物席に座ることができたということです。

この広小路は火除けのために道幅が大変広く、そこを横切って通行しますが、ほかの通りで両側に家が建ち並んでいるような場合には、もし知り合いが住んでいる場合は、その知り合いを頼って家に入れてもらって見る。そういった知り合いがない人たちが、先ほどの広小路の見物席に、今のご時勢では「密だよ」と注意されそうですが、大勢群れ集まって見物したということです。

名古屋城の近くからこの広小路までは、路次楽という音楽の演奏をしながら歩くという噂があったため、広小路までの通りには見物に来る人が大変多かった。「さすがの広小路もびっしりとすき間なき見物の大賑わい大賑わい」という一文があります。両側に家が建ち並んだ通りでも、家の中から琉球使節の音楽を楽しんでいました。【図7】は当時の浮世絵に描かれた琉球使節の姿で、楽器を演奏しながら歩いています。

このように、琉球使節の通行は名古屋城下や近隣に住む人々にとって、通行前の状況も含めた一大イベントであっ



【図7】琉球人来朝之図（部分、国立国会図書館デジタルコレクション）

たということが良くわかります。

続いて、琉球使節が利用する宿場町の対応として、二川宿の事例を紹介します。こちらも同じく天保三年の琉球使節の例を見ていきます。

二川宿の本陣馬場家には、「宿帳」と呼ばれる本陣の利用記録が残っており、幕府役人や大名行列が利用した際の記録を詳細に残していますが、琉球使節が利用した際の記録も書かれています。

大名行列の場合もそうですが、本陣を利用する場合は事前に予約を入れます。その予約が大変早く、今回の琉球使節は天保三年十一月に来るのですが、その一年以上前の天保二年十月二十三日に、琉球使節の宿泊をさせてほしいということで打診が来ています。しかし、二川宿は規模の小さな宿場で、本陣が一軒しかなく旅籠屋も少ないので、大人数の行列を受け入れることは難しいということで、宿泊を断っています。これは琉球使節に限ったことではなく、他の国持大名のような大人数の行列の宿泊も基本的には断っていました。しかし、翌年二月十日に薩摩藩の役人が視察に訪れ、宿泊をさせてほ

しいということを押し切られ、結局受け入れることになりました。馬場家で琉球使節の宿泊を受け入れるのはこれが初めての経験ということになります。

十一月四日、二川宿では琉球使節用に札宿と日雇宿を各六十軒準備します。札宿というのは行列の正式なメンバーが泊まる宿で、琉球使節と薩摩藩士たちが該当します。日雇宿というのは、先ほど大名行列のところでも触れた派遣労働者が泊まる宿です。それぞれ六十軒準備をしていたのですが、いよいよ行列が近づいてきたということで、近くの宿場町まで偵察に行くのですが、どうも派遣労働者が多過ぎて日雇宿が全然足りないとわかった。四十四軒も不足しているということで大騒ぎになり、旅籠屋ではない普通の民家も借りて、なんとか日雇宿を準備しました。しかし、食器、夜着、布団といったものが足りないので、隣の吉田宿、さらにその先の御油宿などから借りてきて対応したということでした。

十一月六日に琉球使節の行列が御油宿を出立し、吉田宿で昼休みをしています。この時は吉田の町中で路次楽の演奏が行われています。そして、七時半（午後三時頃）に行列が二川宿にやってきます。そして、二川宿でもやはり路次楽の演奏がありました。翌七日六時（午前七時頃）、ここでも路次楽の演奏があり、二川宿を無事に出発しました。二川宿における琉球使節の宿泊ですが、本陣の馬場家には琉球人が三十八人、日本人が十七人宿泊しています。宿帳にも「琉球人」「日本人」というふうに分けて記されています。

これ以外に、琉球人宿として旅籠屋を四軒準備しています。これは本陣に隣接または近距離の旅籠屋ですが、琉球人が五十七人で日本人が五十六人という内訳です。そのほかに札宿が六十軒あり、約七百人が宿泊しました。派遣労働者が泊まった日雇宿は、急遽増やした分も合わせて百二軒あり、千七百六十人くらゐが宿泊しました。これらを合計すると、百六十七軒の宿に約二千六百五十人が宿泊したことになります。先ほど見た三河吉田藩の

大名行列の惣行列が二百十人くらいでしたので、いかに琉球使節の行列が大きかったのかがわかんと思います。

それから、琉球使節の荷物の輸送、「継立」と言いますが、これも重要な仕事です。先ほど見た名古屋城下でも、たくさんの長持に何が入っているのか噂になっていましたが、そうした荷物を運ぶ人足や馬を準備するのも宿場町の役目になります。どれだけの人馬が必要だったかと言えば、無償で提供する証文分が人足七百二十四人と馬百疋。公定賃銭という、一般の庶民が使う相場の半額程度のものが人足三百二人と馬百十疋となっています。

人足は合わせて千二十六人で、そのうち二川宿で勤めたのが百人です。それ以外は、二川宿の周辺にある村々から集めた助郷人足が九百二十六人です。馬は合わせて二百十疋で、そのうち二川宿からは五十六疋で、残りの百五十四疋は助郷の村々から出しています。

よく言われていることですが、東海道の宿場町で常に用意しておかなければいけない人馬の数は人足百人と馬百疋です。それをはるかに超える多くの人馬が必要であったということです。

この継立費用のうち、無料で提供する証文分が大変多いのですが、これらは国役金という形で、幕府が諸国から徴発したお金を各宿場町へ分配していました。とは言え、こうした大規模な行列の通行は、宿場町や助郷を出す村々にとっては大変大きな負担になっていました。

この宿帳には、琉球使節が二川宿を出立する日のことについても書かれています。「近在より見物者大勢相出で、馬荷付出し余にて大きにこんざつ仕り申し候」ということで、二川宿の近隣の村々からもたくさん見物人が集まってきました、さらに馬に乗せた琉球使節の継立荷物も多いので、見物人と荷物とで大混雑して大変だったということがわかります。

本陣というのは大名や公家といった身分の高い人たちを泊める施設であり、彼らをもてなす本陣の当主も高い教養

を身に付けていました。二川宿の本陣馬場家には、宿泊者が書いた和歌の色紙や短冊、御用絵師が描いた絵といった拝領品が残されています。馬場家の当主は、琉球使節からも何かもらえないかということ、薩摩藩士に対して、琉球人の書が欲しいということに依頼しています。その結果、江戸からの帰り道に拝領するという約束をとりつけます。

琉球使節が江戸から戻る帰り道では、二川宿では泊まらずに短い休憩だけでしたが、休憩中に約束の書はどうなったか尋ねたところ、担当者が忘れていたのか、断られてしまいました。しかし馬場家の当主はあきらめず、宿泊地の吉田宿まで追い掛けていった結果、扇子五本と書十枚を拝領することに成功しました。この時の拝領品は現存していませんが、天保十三年と嘉永三年（一八五〇）に琉球使節から拝領した扇子が伝わっています。

本陣にとって来朝使節を迎えるということは、大きな経済的負担がありました。先ほど継立人馬の話がありました。が、本陣の側もかなりの出費を強いられました。本陣の建物を修繕し、畳を張り替え、瓦を葺き替えるなど、合計で金三十両ほど費用がかかっています。宿泊代の収入はありますが、宿泊のみの計算でも金九両ほどの赤字になっているため、本陣にとっては経済的なダメージが大きいです。しかし、それ以上に琉球使節のような来朝使節が宿泊するということは名誉なことでもありました。対価には見合っていないものの、こうした拝領品をもらうことで、自分は琉球使節とつながりを持ったのだという記念を残そうという思いがうかがえます。

まとめ

今回は、大きく三つお話をさせていただきました。

一つ目は、江戸時代が行列の時代であったということ。行列の主体とは武士や外国の使節あるいは祭礼などがあり

ますが、いずれも見せ物としての側面を持っています。その中でも、色々な要素が吸収されていく、集約されていくということ、今回はあまり触れませんでした。実は祭礼の行列が江戸時代の行列の在り方というものを一番色濃く伝えていると言えます。祭礼行列で町人が出す練物是不変のものではなく、見物人を飽きさせないように趣向を凝らし、古典や異国の風俗、珍しい動物などを取り入れて変化を繰り返していました。

それから、見ル・見ラレル・見セル・見セラレルの「四見の原理」がはたらくということです。行列に関わっている人たちそれぞれにいろいろな立場や思惑があつて、様々な効果が期待されている。あるいは、ただ単に娯楽として見に来た人であっても、その空間に取り込まれ、行列の構成要素の一部になってしまうといった側面があります。

二つ目は、武士の行列である大名行列です。鎗に象徴されるように、人目につく場所で行列を立てるということで、「見セル」「見ラレル」ということを非常に意識しています。限られた区間だけを整然と歩くだけならいいのですが、参勤交代の大名行列の場合は、江戸から国元まで相当距離があるため、その区間をずっと緊張して大勢で歩くというのは、やはり大変で、時間も費用もどんどん嵩んでしまいます。そのため、人目につく場所で行列を立てて、見られるのも恥ずかしくない格好で隊列を組んで歩きます。しかし、それ以外のあまり人目につかないような場所では、行列本体は小さな行列を組んで進みますが、それ以外は隊列を崩して、スピードをあげて次の目的地を目指します。これには経費を削減するという意味合いが大きいですが、やはりずっと緊張した状態で隊列を組んで進むというのは負担ですので、めりはりを付けて行列をおこなっていました。

三つ目は来朝使節の通行です。いわゆる鎖国体制の中で、異国の文化と接する機会が限られているなかで、庶民が実際に生で異国人を目にする、あるいは異国の音楽や文化に接する機会というのは大変貴重でした。漢詩を嗜む文化人は、朝鮮人と漢詩を読み合う、漢字を通じて意思疎通を図るといった文化的な交流を持つこともできました。

また、直接的な触れ合いに限らず、使節の通行を契機に「異国」そのものに対する関心が高まり、一時的とはいえ異国ブームといえるような状況も生まれました。

大小様々な行列が行き交った「行列の時代」である江戸時代において、外国使節の行列が日本の主要街道を練り返し実際に通行したという事実は、当時の日本人が異国に対して抱くイメージが形成されていく上でとりわけ重要な機会になったと言えます。

参考文献

- 久住祐一郎『三河吉田藩・お国入り道中記』インターナショナル新書、二〇一九年
- 国立歴史民俗博物館『描かれた祭礼』一九九四年
- 東條寛「近世都市祭礼の文化史」(四日市市立博物館『祭礼・山車・風流 近世都市祭礼の文化史』一九九五年所載)
- 豊橋市二川宿本陣資料館『動物の旅ゾウとラクダ』一九九九年
- 豊橋市二川宿本陣資料館『琉球使節展』二〇〇一年
- 豊橋市二川宿本陣資料館『伊豆守が行く―吉田藩の大名行列と松平信明―』二〇一六年
- 根岸茂夫『大名行列を解剖する 江戸の人材派遣』吉川弘文館、二〇〇九年
- 増山真一郎『使節の通行と二川宿』(豊橋市二川宿本陣資料館『琉球使節展』二〇〇一年所載)
- 横山學『琉球国使節渡来の研究』吉川弘文館、一九八七年
- 同『江戸期琉球物資料集覧』本邦書籍、一九九一年
- 同『琉球国使節の渡来と琉球物刊本』(豊橋市二川宿本陣資料館『琉球使節展』二〇〇一年所載)
- ロナルド・トビ『鎖国』という外交 新視点近世史(全集 日本の歴史 九) 小学館、二〇〇八年
- 渡辺和敏「見られ、見て、心に残った朝鮮使節の通行」(常葉美術館『朝鮮通信使展―江戸時代の善隣友好―』二〇〇四年所載)